HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北駕文庫の蔵書と歴史
著者	徳永，良次; TOKUNAGA, Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(65): 32-40
発行日	2018-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北駕文庫の蔵書と歴史

徳　永　良　次

○徳永氏　初めまして，徳永と申します。よろしくお願いします。

三浦先生に引き続きまして，私がお話をいたしますのは，松浦武四郎とはやや離れて，松浦武四郎の資料を所蔵している本学の歴史的な文庫がありまして，それを「北駕文庫」（ほくがぶんこ）と呼んでおります。この文庫については学内の教職員の方もあまりよく知らないという現状がございますので，簡単に御紹介させていただき，かつ松浦武四郎と北駕文庫，それに初代校長の浅羽靖とのかかわりについて，何か考えられるところはないだろうかというお話を簡単に触れていきたいと思っております。

まず，北駕文庫とは，一言で言うと，近代北海道における知の宝庫と呼んでもいいほどの，質量ともにすぐれた蔵書を有している文庫でございます。その設立は明治44年に，北海学園大学の前身，もっと言えば北海高校の前身の北海中学校が図書館として開設しました。そのときの初代校長である浅羽靖（あさば　しずか）という方が設立したということであります。

北駕文庫は，明治44年時点で1万5,143冊という蔵書目録がつくられているということが知られております。

ところが私の手元には，皆様のお手元にプリントがありますが，大正3年に印刷された「北駕文庫蔵書略目録」というものを見ますと，この時点で，まだ4年しかたっていないのに3万点の所蔵が確認でき，非常な勢いで図書が増加しています。それもちょっと驚きなのですが，当時の蔵書数15,000冊というのを，一般向けに札幌市内で公開を前提とした，いわゆる公開図書館がどの程度の所蔵があったかというと，札幌女子小学校の戊申文庫では1,429冊，北九条小学校，約1,100冊，北海道教育会附属図書館で5,908冊ということを考えますと，明治末時点での蔵書数の圧倒的な量

というのはおわかりいただけるかと思います。

この北駕文庫を設立した浅羽靖校長は，安政元年，江戸時代のほぼ終わりぐらい，大阪に生まれ，明治16年に大蔵省の役人として函館出張所に赴任したというのが北海道とのかかわりで，それ以来ほぼずっと，亡くなるまで北海道を拠点として活躍していたということです。

明治20年に北海英語学校（北海中学校の前身）の校長になります。そのときには札幌区長を務めていた。つまり札幌の名士であるという関わりもあって，私立の中学校の校長になっていただこうと，北海英語学校のメンバーが推挙したという経緯があるようです。その後，衆議院議員に当選しまして，亡くなるまで10年間，衆議院議員をそのまま継続しております。同時に北海英語学校，後に北海中学校に変わりますが，北海中学校の校長もしています。

そのような時に，明治44年に皇太子が北海道を行啓される，北海道に来られるということが決まります。明治44年といいますと，明治は45年で終わって，改元されて大正元年ですので，翌年には大正という年号になるということで，そういう年代でもあります。その時に皇太子が北海道に来られる，しかも北海中学校を見学するということになりまして，その関係で北駕文庫を設立したということが知られております。

その４年後に，大正３年に「北駕文庫蔵書略目録」，略目録というのは，簡単な目録ということですが，それが刊行されました。ところが，残念ながら体調を崩しまして，同年に浅羽靖校長は逝去され，北駕文庫はその後，時を止めることになりまして，タイムカプセルなどに入ってしまうという時代が続きます。

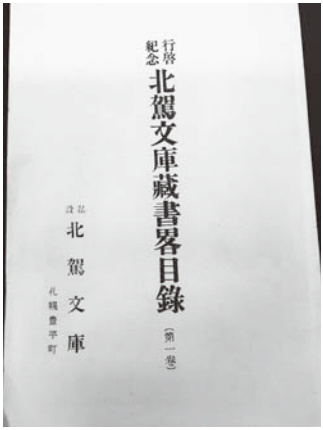
続きをごらんいただきたいと思います。

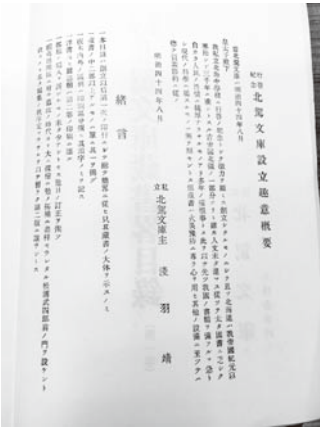
明治44年の皇太子行啓は，当時の浅羽校長にとっていかにインパクトが強かったかということなのですが，皇太子は８月20日に函館に上陸しまして，およそ１カ月かけて北海道内各地を行啓することが日程上決まりまして，８月29日に北海中学校を行啓されたということです。まず，学校を見学するということで，師範学校，札幌中学校（今の札幌南高校）。それ

から，私立である北海中学校を訪れたということが知られております。私立の学校を皇族が，しかも将来天皇になる皇太子が訪ねるということは，全国的に見ても珍しかったということです。それで，浅羽靖校長は非常にそのために意を尽くしたということが二つございまして，一つが，北駕文庫を設立しようということだと言われています。

もう一つは，これは余談なのですが，特にこの近辺に住んでおられる方にはぜひ知っていただきたい，NHKのブラタモリ的情報なのですけれども，「御成り道路」というのを，浅羽校長みずから生徒を動員してつくらせまして，それが現在，道路としてまだ生きています。私としては，御成り道路と呼んでいただきたいような道路なのですが，後で写真などもお見せいたしますけれども，この校舎のすぐ隣に北海高校の正門がございますが，その正門から真っすぐ不思議な道が出ておりまして，それが御成り道路ということで，もともとは原野だったのです。ところが皇太子がいらっしゃるので，ケモノ道のような道はあったらしいのですけれども，そこを皇太子のお車を通らせるわけにはいかないということで，きちんとした道から接続する直線の，現人神のようなお方が曲がって校舎に入るというのは恐れ多いので，まっすぐ垂直に校門に入って来られるような道を3週間かけて造らせたということが知られております。

蔵書目録と設立趣意





先にお話した北駕文庫の蔵書略目録についてです。頭の部分に行啓記念というふうに記してございまして，やはり皇太子が北海中学校に来られることを記念して北駕文庫と名づけて，その蔵書の目録というものを出版するという意味の本が出されております。私立北駕文庫とありまして，まだ札幌豊平町であった時代に出されております。その隣が，１枚開きまして，扉に設立趣意の概要と緒言ということで，どういう内容でこの目録が配置されているかということが書いてあります。

設立の要点として，１点目に，当北駕文庫は，明治 44 年８月皇太子殿下，我が私立北海中学校に行啓の記念として……，（中略して）創立したものであるということです。つまり，皇太子が来なければ，これができたかどうかというのはわからない。

北駕文庫の北駕というのは，この文章からいえば，北海中学校の「北」に中国語由来の語で，鶴駕という単語がございまして，これは，皇太子などの貴人，たっとい方が乗られるお車のことを「鶴駕」というそうですが，その両方の一文字ずつとって北駕文庫と名づけたというふうに考えられます。

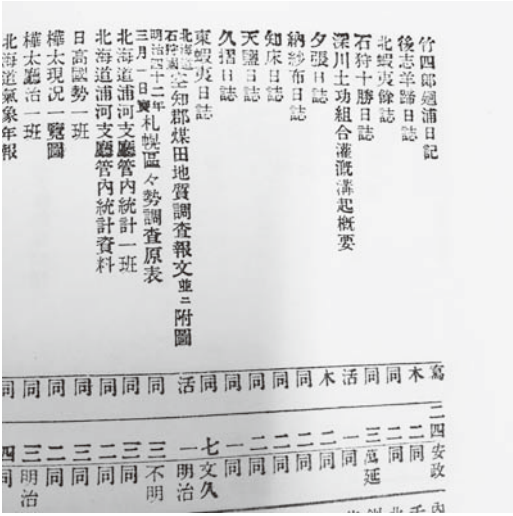
設立の２点目としては，「北海道は人文いまだ進まず，したがって，甚だ国書に乏しく」ということで，北海道は北方の地ですので，中央の東京からもかなり離れて，まだまだ，なかなか人文的な，日本的な文化というものが浸透していない。それに関連して，国書に乏しく，つまり日本語や日本文化に関する本というのも所蔵されているところが少ないということです。御存じのように札幌農学校は，もともと英語で授業をして，しかも農学を北海道に定着させるためにつくられた学校ですので，余り国書ですとか，人文ということに関しては，意を用いていない。その辺が浅羽校長には，残念なところであると。日ごろそういう思いを抱いていたようです。まず，我が国の書類を整備するということが第一。次，目録の配列方針としては，簡略に記載せざるを得ないということです。

それからもう１点は，洋書類，雑誌類も持っているのだけれども，これは第２次の印行に譲る。まずは国書，日本の書類の目録をつくるというこ

とを前提にした。

それから3点目が，ここが重要かと思うのですが，原文のまま読みますと，「蝦夷地開拓につきて，幕政の時代より大いに探検に努め，拓殖に尽粋せられたる松浦武四郎の部門を設けんと欲するも，いまだ編集の秩序定まらざるをもって，しばらく第2版に譲らんとす」ということで，松浦武四郎部門というところを一つ設定しようとしたのだけれども，どういう配列したらいいかというのがまだ決まっていないので，ここは後に回す，第2版に譲るというふうに書いてありまして，この辺が松浦武四郎と北駕文庫とのかかわりで，かなり松浦武四郎に関して浅羽校長は重視していた，重要な点であると見ていたことがわかります。

目録記載例(武四郎関係書籍アリ)


竹四郎廻浦日記　寫　二四安政
後志羊蹄日誌　木　二同
北蝦夷餘誌　同　二同
石狩十勝日誌　活　三慶延
深川土功組合灌漑溝起概要　同　一同
夕張日誌　木　二同
納紗布日誌　同　二同
知床日誌　同　二同
天鹽日誌　同　一同
久摺日誌　同　七文久
東蝦夷日誌　活　一明治
北海道空知郡煤田地質調査報文並ニ附圖　同　三不明
石狩國明治四十二年三月一日實札幌區々勢調査原表　同　三同
北海道浦河支廳管内統計一班　同　三同
北海道浦河支廳管内統計資料　同　二同
日高國勢一班　同　三同
樺太現況一覽圖　同　二同
樺太廳治一班　同　三明治
北海道氣象年報　同　四同

ただし，第2版に印刷された蔵書目録にも，今，写真に示してあるのは，先ほど三浦先生が最後のほうにお話になっていた，要するに松浦家から浅羽校長に一括して譲られた本があるということでしたが，それが恐らく配置上もそのまま目録にずらっと並んでおりまして，「竹四郎廻浦日記」というところは，松浦武四郎の関連書籍が大半を占めているということで，この辺の関係の深さはうかがわれるところです。

現在の北駕文庫

そして，現在の北駕文庫ですが，この建物を出ていただきまして，左に50メートルほど歩いていただきますと，札幌軟石の蔵がございまして，これがもともとの北駕文庫の書庫になっています。この２階建てのところに，もともとの蔵書は所蔵されていたということが知られています。

そして，そこに所蔵される本には，ほぼこのような蔵書印が押されておりまして，少なくとも右側の小さな北駕文庫という朱印はほぼまんべんなく押されておりまして，大きな印記，先ほど展示されていた現物にも押してありますが，これもまま押してあることがあります。大きなほうの印文は，読み方が不確かですが，「明治四四年／八月辱／臨御仍建／文庫伝光／栄於無窮」，つまり，恐れ多くも皇太子殿下が明治44年８月にいらしたので，その記念として，その光栄を永遠に伝えるということで，この北駕文庫を建てたということが知られます。

もう一つの浅羽校長がやったものが，ブラタモリ的なものですが，御成り道路です。お手元の写真では見にくいのですが，左側の写真は，正面に北海高校の正門を見た写真です。右側は，逆に北海高校側から御成り道路に向けて撮影した画像です。実際には北駕文庫から高校の正門を出ていただきますと，全く同じ道路が見えますが，100ｍくらいしかない非常に短

御成り道路　正門への不思議な直線道路

い不思議な道です。

これは，お手元の地図にも示してございますが，少し見えにくいのでお話をさせていただきますと，現在，平岸街道，学園校舎のすぐ前を大きな４車線の道が走っておりますが，それと少し角度を変えた，豊平小学校から平岸街道のガソリンスタンドに出てくる細い道がございまして，これがもともと真駒内へ真っすぐ通じるハイウェイ，古い地図を見ますと，真駒内道路としてつくられたようです。それ以外はほとんど原野だったので，真駒内道路から真っすぐ直線で100メートルぐらい，50間の道を開拓させたというのが，御成り道路というふうに言われます。

古い地図を見ていただきますと，明治30年代の地図ですと，全く何もありません。ただ，果樹園（リンゴ）と原野が広がっている漠とした土地。もともとの北海中学校はここにございまして，二条市場が南二条の一角，市立中学校があるのが，直前の北海中学校があった位置です。明治の終わりぐらいに北海中学校が移転しまして，これは現在の国道36号線（弾丸道路）から折れて真駒内に行った道ですが，ここに何の道も書かれておりません。

昭和初期の地図ですと，かなり宅地化が進んでいて，縦横無尽に道路が

走っていますが，やはり不思議な，理由のわからないような道がついていて，これがいわゆる現在の御成り道路になっているというふうに考えられます。これも浅羽校長の執念かということです。

学内を歩いていただきますと，北駕文庫から御成り道路を抜ける前に，行啓記念碑という石づくりの像と浅羽校長の銅像が左右に建っております。ちょうど正門の横の門の左右のところに石碑と銅像が建っております。これで行啓記念と浅羽校長の栄光を伝えるということのようです。

北駕文庫の特徴としまして，一般的に図書館といいますのは，設立時代からだんだん蔵書を右肩上がりにふやしていくということです。大体新刊を仕入れますので，当時の新刊をどんどん増やしていくということですから，所蔵数と所蔵されている本の年代というのが大体正比例していくのが特徴ですが，北駕文庫の場合は，急激に数を増やして急激に落ち込んでいく，ある一定の期間の本しか所蔵されないという非常に珍しい特徴を持っています。日本の有名な図書館ですと，例えば奈良の正倉院ですとか，私が調査に行っております京都の高山寺という鳥獣戯画で有名なお寺もありますが，それと同じような特徴を持っていまして，ある特定の時期の文献，資料だけが集中して保管されているという特徴があります。

次に，緒言にも書いてありますけれども，国書中心，つまり，科学書とか理系の本は非常に少ない。特に，国書といっても，江戸時代の版本，江戸時代に印刷された和装本が大量に所蔵されているというのも特徴です。

それからもう一つが，総数が激増している。明治 44 年の皇太子行啓のときに 15,000 冊，ところが 4 年後に倍増して，最終的には 42,000 冊あったというふうに言われています。

浅羽校長が，ある雑誌の表紙に書き込んだメモというのがあるのも知られていますが，「再参考トナル事モアラン／一片ノ印刷物ダモミダリニ捨ツベカラズ」と書いてあります。たった 1 枚の印刷物でさえ勝手に捨ててはいけないというふうに浅羽校長は，みずから館員に指示して図書の重要性を訴えたということが知られています。

これを見てみますと，浅羽校長という 1 人のカリスマ的な存在と，それ

から,皇太子が行啓するという奇跡のような出来事が見事に重なった結果,この北駕文庫は形成されていったのではないかと思います。確かに浅羽校長は全精力，全財産を北駕文庫の設立にかけたということが知られておりまして，浅羽校長が亡くなった後にはほとんど財産は残らなかったとも言われております。恐らく相当私財を投げうって本を購入したり，集めたということのようです。

最後に，松浦武四郎との関連ですが，上に書いてあるのは，冒頭ちょっと御説明した蔵書目録の最初に書いてあったことです。下のところは，北海タイムスという古い新聞がございまして，ちょうど行啓の直前，明治44年8月9日の記事に,「本道の名づけ親松浦武四郎」というタイトルで，浅羽校長が北海タイムスに寄稿している原稿がございまして，このような注目すべき記事がございまして，1点目に,「靖が所持する所の蝦夷日誌の跋に……」とありまして，この時点で幾ばくかの，武四郎関係の本を既に浅羽校長が所持していたということが知られます。

それから，2点目のところは，先ほど三浦先生がおっしゃったところで,「東宮殿下（大正天皇）の行啓に際し上覧出願したる書類も亦少なからず……」ということで，松浦武四郎と北駕文庫といいますか，直接，浅羽校長本人とのかかわりを示すものとして重要な記事かなというふうに思われます。

以上，私からは，松浦武四郎本人というよりは，松浦武四郎資料が所蔵されている北駕文庫について簡単に紹介させていただきました。御清聴ありがとうございました。(拍手)